

もちあげられて、手の甲に尖った物質が突き刺さった。黒い頭があった。自然に、右手が黒い頭を叩いた。左手をひき離れた。眼の前に、白い歯が物質のように光り、血で赤く濡れている。何だ。あの青年が仁王立ちになって、X氏を睨みつけていた。噛まれたか。なぜだ。X氏は、燃え盛る鳶色の眼を視た。

—— いったい、何をやる気だ

—— 俺じゃないよ

—— どういうことだ、説明しろ

—— あんたがわるい、わるいのはお前だ

ざわめきの波が立ち、一瞬2人の立つ位置が地核のように燃えあがり、あまたの眼が視線を流したが、声を掛ける人もなく、人の流れは人を避けるように移動して、誰一人足を止めるものはなかった。朝の時間の目的はそれぞれに決まっただけで、火花を散らす気配を見せる他人に心を動かす余裕も親切心も見られぬふうだった。

—— ひとつの手を噛んだのは君じゃないか

—— そうさせたのは、あなただ

—— 妙なことを言ってくれるね

青年は頬を歪めて薄笑いをした。

—— 本当は、わかってるんだろ

—— 何が？

—— 理由をさ

—— わからない。変なことを言うな

X氏は、燃え盛って光っている青年の眼を正面から睨みつけた。青年も一歩も退かぬ構えだった。

制服が駆け寄って来た。駅員と保安官らしい。青年が叫んだ。

—— お巡りさん、こいつ変だぜ

青年は、人差し指で頭を2〜3度叩いた。制服たちは、X氏を注視した。X氏は、制服たちの眼の色を察して、抗議した。

—— 私が何をした？ 君こそ、どうかしてるね、他人の手を噛んでおいて、何を言うんだ

—— だから、言ったら、本当は俺じゃないって

—— どちらかが嘘を言ってるな

—— 真実はひとつだ

—— 2人ともまちがっている場合もあるし、2人とも正しい場合もあるぞ

—— 馬鹿を言うな、事実のひとつだ